

大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

1521年にマゼラン艦隊がビサヤ諸島（フィリピン）に到達して以降、スペインは遠征隊を東南アジア方面にたびたび派遣します。やがて、71年にルソンのマニラを征服する前後からは、現地総督府から大量の報告書が作成されるようになります。それらは現在、スペイン各地の文書館などに保管されています。

まず、65年の報告書には、ミンダナオ島やルソン島での金の採掘情報とともに、日本人の現地進出が記されています。それによると、ミンダナオ島の北端に位置するブトゥアン川、スリ

吉近バルタサル

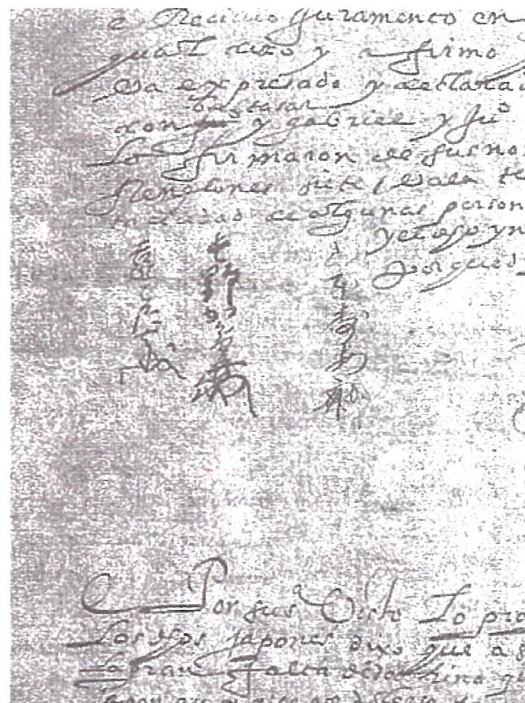
ガオ川などで大量の砂金が採られ、特にルソン島には琉球人や日本人を交易相手とするムスリム（イスラム商人）が居住していたといわれています。

日本人渡来の記述は、67年や72年の報告書にもあります。ルソン島とその南のミンドロ島に毎年渡来する日本船には日本銀が積まれていて、金1・銀2・5の比率で交換。特に、ルソン島中部の港アゴ（アグー）への日本人来航が多く、17世紀半ばには日本人金掘り師2人が働

ルソンに渡った豊後人

いていたということです。

85年以降には、日本人とマニラ総督府との接触を契機として、ルソン渡航日本人の姓名、出身、渡航状況などが具体的に記録されるようになります。同年、ルソン島北部のカガヤン地方に日本人11人が乗った船が漂



「吉近はるたさ（バルタサル）」らの名が記された1587年の嘆願書（マドリッド・国立歴史文書館）

着し、マニラまで回航されました。渡航集団の代表は、豊後（大分県）出身で、平戸（長崎県）の大名松浦鎮信に仕える「吉近バルタサル」というキリスト教徒でした。吉近は、日本イエズス会のガスパル・コエリヨの書簡を携えていたとされます。

本へ帰りました。そして、松浦氏に渡航報告をした上で、87年にマニラ総督宛て松浦鎮信書簡を携え、再び40人の集団でマニラに渡航したといわれています。吉近が鎮信の使者としてマニラに渡ったのは、鎮信が豊後の大名大友義鎮（宗麟）の「鎮」の1字を授かる主従関係にあったからで、大友氏の命で松浦氏家臣となったことによるのでしょう。

スペイン・マドリッドの国立歴史文書館には、吉近らが日本への宣教師派遣を嘆願した87年9月26日付書簡が保管されています。その横書き欧文の末尾に、左から順に「吉近はるたさ（バルタサル）」「長野加分里（カブリ）」「山本寿安（ジュアン）」3人の縦書き署名と花押が確認できます。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）